

外国につながる子どもと学生がともに歩む場 —府中市国際交流サロンでの取り組み—

荒木大岳 岸野彩花 後藤亜也佳
小林奈央 小林由芽 妻井瑞季
(東京外国語大学 学生)

1. はじめに

東京外国語大学の学生は学習支援サークル「くりふ」を結成し、府中市と連携して「外国につながる子ども」の学習支援をしている。外国につながる子どもとは、外国人の両親、または国際結婚の家庭で生まれ、複数の言語や文化の中で育つ子どもである。そのような子どもたちは言語や文化的な面での違いによって日本での生活において困難な場面がある。例としては友達とのコミュニケーションに困る、授業についていけないなどだ。このような言語と文化の壁を乗り越えるために、子どもたちが安心して友達や学生と話せる場をつくることを目標に活動している。そのために、学生は子ども一人ひとりにあった支援を考え続けることを意識している。年齢も近い学生だからこそ子どもたちに寄り添い、コミュニケーションをとる中でバックグラウンドの異なる子ども一人ひとりの課題に目を向けることができる。各々取り組んでいる課題は異なるが、活動後に全体で振り返りを共有することで学生同士の意見交換や先輩からのアドバイスももらっている。この振り返りを毎回することで一つの団体としてのまとまり意識を持って活動している。

2. 普段の活動

子どもによって課題への取り組み方は異なる。マンツーマンを通して分かった子どもそれぞれの個性を活かして、時には失敗もするが、様々な方法を考えて一緒に課題に向き合っている。

事例1) カタカナが苦手な子どもAのために学生Bはかるた作成を学習に取り入れた。ある文字から始まるカタカナの言葉を考え、思いつかない場合はヒントを与えた他、図鑑を見て探した。その単語で文章を作り、学生が直してからカードに記入した。これを通してカタカナや伸ばし棒が徐々に正しく使えるようになった。Aはかるた作成について「楽しい。」「50枚全部完成させたい。」と言っており、継続して楽しみながら学習に取り組んでいる様子が伺える。

事例2) 子どもCは既習漢字を使わずに文を書き、促音長音が苦手(例：はいって→はいて、マンゴー→マーゴ)だった。そのため、学生Dの提案により双六づくりで各マスの文章に漢字を交えて書いた他、大蔵、池上監修(2005)を参考に作成したカタカナが書いてあるアコーディオンカードを正しいつづりに直し、つなげて長さを競う電車ゲームに取り組んだ。これにより作業化した学習から自分で考える主体的な学習へとつなげることができた。Cは双六とアコーディオンカードに積極的に取り組み、「何回もやりたい。」と語っていた。

3. お楽しみ会

年に3回行うお楽しみ会では、普段交流のない子ども同士や子どもと学生が知り合い自然と日本語で交流できる場となるよう、毎回コンセプトを決め、アクティビティを企画している。例え

ば、昨年7月は、新しくサロンに来た子どもたちや普段関わりの少ない子どもと学生がお互いの顔と名前を覚える機会になるよう、ニワトリゲームとバースデーチェーンを行った。ニワトリゲームでは、じゃんけんに勝つごとにタマゴ→ヒヨコ→ニワトリと成長するルールの下、自分と同じ状態の人に積極的に声をかけてじゃんけんをする姿を見ることができた。バースデーチェーンでは、誕生日の聞き方や日本語特有の日付の言い方を使って皆で協力して一つの輪を作った。また昨年12月は小学生を対象に行い、交流だけでなく日本のお正月文化を知る機会となるよう、巨大福笑いを企画した。子どもたちは各自新年の抱負をグループ内や学生の前で発表し、協力してパーツを集め福笑いゲームを行った。各回とも子どもの学年、日本語レベルの子どもでも楽しんで参加できており、ルールをあまり複雑にしないことで、子どもならではの発想や場の盛り上がりを感じるものとなった。お楽しみ会は回を重ねるごとに、単なるゲームから、遊びの中に学習を取り入れた活動へと変化している。

4. 高校入試説明会

昨年12月に実施した高校入試説明会では、中学生を対象に都立高校の入試制度を紹介した。外国につながる子どもにとって、複雑な入試制度を理解することは難しい。実際に学生がある中学三年生の子どもに進路について尋ねてみたところ、入試の制度を十分理解できておらず悩んでいる様子であった。そのため、大学のボランティア・コーディネーターのアドバイスを参考に中学生を対象にした高校入試説明会を行うことになった。説明会は高校に進学することの意義やメリットを理解してもらう目的で行った。推薦入試、一般入試、在京外国人入試などの諸制度について、学生が簡単な表現でまとめた資料を作成し、子ども一人ひとりのペースに合わせて日本語のサポートや情報を補足しながら入試制度を説明した。説明会後には子どもたちが積極的に学生に質問する様子や、子ども同士で進路の話をしている様子が伺えた。しかし一方で高校受験への嫌悪感からふさぎ込んでしまった子もいた。

5. おわりに

私たちの目標である「子どもたちが安心して友達や学生と話せる場をつくる」という点は上記の高校入試への嫌悪感が出てしまった子もいるように、まだ道半ばであり今後も継続的な取り組みが必要である。このように活動ではうまくいかないことも多い。しかし、週に一回一緒に過ごしているからこそ、苦手なことや好きなことがわかるようになり、失敗しても次に繋げることができる。子どもたち一人ひとりが抱える課題は様々である。そのような状況での実践はいつもうまくいくとは限らないが、最も大切なのは継続することである。

学生の中には、何か子どもの助けになれることがしたいという気持ちからこの活動を始める人もいるが、活動をする中で、子どもの助けになるということの難しさを思い知る。しかし、学生だからこそできることもあるのではないだろうか。この活動の場には、支援者と被支援者という関係などはなく、毎週一緒に勉強したり遊んだりする近所のお兄さんお姉さんというようなあたたかい雰囲気がある。それが私たちの活動の良さだ。学生だからこそその近い距離から子ども一人ひとりに寄り添い、ともに成長していける場所を今後も守っていきたい。

【引用文献】

大蔵守久・池上摩希子監修(2005)『子どもといっしょに！日本語授業おもしろネタ集2』凡人社